

ICAN Monthly Report 5



イエメンでのアイキャンの食糧提供

イエメン国内避難民への食糧提供

<紛争地の子どもたちの事業：担当スタッフからのレポート>

イエメンでは、昨年 3 月に紛争が激化し、空爆と戦闘によってこれまでに 6,000 人以上が亡くなり、36,000 人以上が負傷しました。そして、人口 2,500 万人の 10% 以上に上る 270 万人が現在もなお、安全な場所を求めて国内で避難しています。この状況に対して、アイキャンは、現地 NGO とともに、2015 年 12 月より準備を開始し、2016 年 4 月より国内避難民が最も多い場所の 1 つであるイエメンのハッジヤ州において、避難民への食糧提供を開始しました。5 日間をかけて、州内の国内避難民が多く集まる場所を回り、合計 1,143 世帯に対し、小麦粉、米、砂糖、油、ミルクといった、生存に最低限必要な食糧を提供しました。

ここに来た人々は、紛争によって民家や病院、学校までもが破壊される中、戦火を逃れて命からがらたどり着いた人々ばかりです。そこには整備された「難民キャンプ」はなく、避難民は木の下で眠ったり、あり合わせの布でテントを作ったりして、風雨をしのいでいます。僻地にあるため、国際機関や NGO の活動も届かず、きれいな飲み水も、明日食べる物も欠乏している状況でした。

そのような中、アイキャンの食糧を積んだトラックが到着すると、避難民の中から自らボランティアを志願する人が現れ、荷卸しを手伝ってくれました。高齢者や体が不自由な人には、テントまで物資を運ぶなど、苦しい状況の中にあってもお互いに助け合い、労わり合っていました。食糧を受け取った人たちからは、「本当にありがとう」、「これで明日から食べられる」、「どうか、こうした活動を継続してほしい」などの声が寄せられました。

イエメン紛争は、国連の仲介によって和平協議が続いています。しかしながら、和平合意が成立するかどうかは不透明です。また、和平が実現したとしても、紛争によってこれまでに壊された家、学校、病院、水、電気等の生活インフラを回復するには、膨大な時間と労力がかかります。アイキャンは、これからも食糧などの生活に必要な物資の提供などを継続して実施することで、イエメンの和平に貢献していきます。



ICAN ジブチ事務所
野中亜紀子(のなかあきこ)
～プロフィール～
大阪外国語大学(アラビア語)、ロンドン大学 SOAS 校開発学修士課程を卒業後、在イエメン日本大使館勤務、イエメンでの個人事業経営等を経て、2015 年 11 月より現職。

Project Site



認定 NPO 法人アイキャン

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須 3-5-4 矢場町パークビル 9 階 TEL/FAX : 052-253-7299 メール: info@ican.or.jp

ホームページ <http://www.ican.or.jp> フェイスブック <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>

【編集者から一言】 マンスリーパートナーになっていただくことで、イエメンでの活動も応援していただけます。詳細は上記 HP へ。

Close up

I. 危機的状況にある子どもたちと「ともに」行う活動

全10事業の中から、今月はこちらの2つをご紹介します。

路上の子どもたち

4月9日/リサール州サンマテオ

「子どもの家」入所の子どもが6名に



児童養護施設「子どもの家」に、新たに3名の子どもが入所し、入所児童は計6名になりました。皆でとる最初の食事の際、寂しさから泣き出す子もいましたが、ジャストワーカー(路上の若者のリーダー)2名が駆けつけ、子どもたちの親睦を深めるゲーム等を行うと、泣いていた子からも次第に笑顔が見られました。6名は、ここで生活しながら、6月の新学期に向けて通学再開の準備をします。

先住民の子どもたち

4月30日/ミンダナオ島プキドノ

環境教育と植林で、村に緑を



森林の伐採や焼き畑農業が行われ、環境問題が深刻化しているミンダナオの先住民の村で、100名の子どもに対し、環境保全に関する講義を行いました。講義後は、皆で計250本の苗木を植え、保護柵を作りました。マリーさん(17歳)は、「木の伐採や焼き畑農業による、環境への悪影響がよく分かりました。今日植えた苗木を大切に、環境を守っていきたいです。」と話しました。

II. できること(ICAN)を増やす活動

全7事業の中から、今月はこちらの2つをご紹介します。

語学教室事業

4月7日/名古屋

「友だち割」で新規入会!

日本事務局で行っているチャリティ語学教室「スマイルチケット」の無料体験で3月に英語のクラスを受講された方2名が、4月から揃って入会されました。紹介した人もされた人もレッスン料が割引になる「友だち割」の適用となりました。2名ともフィリピンに長期で滞在された経験があり、「フィリピン人の先生たちの英語を聞くと、当時の事を懐かしく思い出さし、楽しい」と話していました。



国際理解教育事業

4月13日/名古屋

現地スタッフが伝える、住民の声

マニラ事務所駐在職員の阿部による帰国報告会を行い、8名の方が参加しました。パヤタスごみ処分場周辺地域の現状や、そこで生計向上のためにフェアトレード商品の生産に励む母親たちを紹介しました。参加者からは、「フィリピンの現状を知ることができ、以前よりも興味がわいた。今までは、フェアトレード商品を積極的に買っていませんでしたが、買ってみようと思う」などの感想を頂きました。



今月のTopic

チャリティコンサートで路上の子どもを応援!

4月30日/マニラ



マニラ在住の日本人で構成されたバンド、マニラエクスプレスが主催するチャリティコンサートが開催されました。第4回目となる今回は、177名が来場し、出演者10組による演奏やダンスが披露されました。来場者からは、「出演者の熱いパフォーマンスと運営の皆さんの想いが伝わる素晴らしいコンサートでした。」との声や、出演者からは、「コンサートが大成功で感動しました。これからも続けます。」との声がありました。収益は過去最高となり、アイキャンの路上の子どもたちの事業に寄付されました。

今月のMedia

4月14日 中日新聞(名古屋) 路上の子どもたちの事業へのご寄付

今月のICAN 名人

◎筒井さん、語学教室のほうでも、これからよろしくお願ひします!

マンスリーパートナー 筒井広治さん

「タガログ語を学んでまたフィリピンへ」

インタビュー:5月20日

私は、2014年に「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」が名古屋で開催された頃、関連サイトを検索していて、たまたまアイキャンのスタディツアーを知りました。5日間のツアーの内容が濃そうで、面白そうだと思います。その年の12月に参加しました。

ツアーでは、ごみ山の大きさや、2000年の崩落事故の話が印象に残っています。そこでごみを捨てて生活している人が大勢いるという事実も、日本では考えられないことで衝撃的でした。そういう環境でも、はつらつとしていて天真爛漫で、自分たちに飛びついてきた子どもたちの目の輝きも印象に残っていますが、その一方で存在する、格差や教育環境、インフラ整備の遅れなど、ツアーで目の当たりにした様々な問題を多くの人に伝えたいと思いました。

帰国後は、日本事務局を時々訪れ、駐在職員の帰国報告会に参加したり、ボランティアをしたりしてきました。そして、これまで関心はあったものの、仕事の都合で来られなかったチャリティ語学教室「スマイルチケット」に、この5月から入会しました。またフィリピンに行きたいという想いと、新しい言語に挑戦したいという思いで、タガログ語を勉強しています。これからも、スマイルチケットの受講やマンスリーパートナーの寄付を通して、継続的に関わっていきたく思います。

